
HAPPY END

y t

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H A P P Y E N D

【Nコード】

N 4 2 0 2 0

【作者名】

y t

【あらすじ】

聖大天使アルテマとの死闘は最終局面を迎え、ついに勝敗は決する。しかし、アルテマは憎き敵の中に、周囲とは違った光を放つ者を見つける。彼の名はクラウド。異世界から、イヴァリースへと召還された青年。

高位な次元の力を嗅ぎ取ったアルテマは、彼の深層意識の中へ潜り込み、クラウドに甘い記憶を思い出させる。しかしそれは、彼にとって本当に幻だったのだろうか。刹那によぎった、夢なのだろうか。

聖大天使アルテマ戦アタックチーム。

ラムザ 〓 ベオルプ。

アグリアス 〓 オークス。

シドルファス 〓 オルランドウ。

ムスタディオ 〓 ブナンザ。

そして、クラウド 〓 ストライフ。

五人の勇者たちは、血みどろの戦を背後で糸引いていた巨悪を、遂に追いつめていた。美しい天女の姿だったアルテマは、ラムザたちの驟雨のような攻撃に耐えかね、今現在世にも醜い物の怪と化している。妖艶な笑みを浮かべていた顔は肉片ひとつ残らぬ骸骨となり、しなやかな動きでラムザたちを翻弄し続けた肉体を動かすのは、もはや彼女の強大な魔力だけであった。全ての筋肉が削げ落ちたアルテマは、正に？魔？そのものを纏い、何の邪魔もない現世への復活を妨げたラムザたちへ、煮えたぎる鉄の憎しみに満ちた眼光を向けていた。

雷神シド、オルランドウが裂帛の気合いと共に無双稲妻突きを叩き込む。大きく体勢を崩されたアルテマの膝が落ちた。

『フフフ……？力？……我が？力？ガ逃ゲテユク』

聖大天使アルテマは天を仰いだ。様々な色が寄り集まって形成されている、不気味な色を湛えた空だ。空間のあちこちには、朽ち果てた飛空艇が散在している。それが浮いているのか、はたまた何かの上に乗っているのか、一概には言い表すことが出来なかった。

ラムザは聖騎士アグリアスに目配せする。彼女はその視線に気が付き、剣を構えた。

「ラムザ、貴公に預けた私の命、今ここで賭けよう！」

聖なる光を刀身に宿したアグリアスが、力強く地面を蹴った。「ムスタディオ！ 援護頼むッ！」機工士ムスタディオはリーダーから発せられた指令に答える。

「ガッテン承知よオ！」

黒光りする銃を構えたムスタディオは、そのままアルテマの眉間に照準を合わせた。少し前ならいとも簡単に弾き落とされたはずだが、今彼の敵は以前の力を失っている。この期を逃す手はない。

「よし、行こう！ クラウド！」

ラムザは横にいた青年に声をかけた。青年はこくりと頷くと、火山の頂上から発見された剣であるマテリアブレードを握りしめた。この剣の柄の部分にはめ込まれた宝玉の力によって、異邦人クラウド「ストライフは数々の技を繰り出すことが可能となる。

力強く天を向いた金髪をなびかせ、クラウドはラムザと共に走り出した。凄まじい魔力の風が一行に吹き付ける。アルテマは満身創痕ながらも、彼らを迎撃しようとしていた。

「させるかよ！」

ムスタディオのブレイズガンが吠えた。狙い澄まされた弾道は、正確に聖天使の眉間を貫く。魔力の溜めを司る頭部を破損したアルテマは悲鳴と共に額を押さえた。堪らずうずくまる彼女の視界が飛空艇の甲板を捉える。次の瞬間、その床が赤い光に包まれた。骨を砕くような音を伴い、下方から聖剣技？北斗骨砕打？の波動が噴出する。

直撃を受けたアルテマの身体が宙を舞った。ラムザとクラウドは、タイミングを合わせて跳ぶ。

「でやあッ！」

細身の剣が、アルテマの心臓に当たる部分に突き刺さった。空中で致命の一撃を見舞ったラムザは、剣を突き刺したまま、クラウドに向けて叫ぶ。「今だクラウド！」同時にアルテマの身体を蹴って戦線から離脱。ラムザの声を受けたクラウドが、マテリアブレードの煌めきに照らされた敵を視界に収めた。

……！

(えっ?!)

クラウドの剣がリミット技?ブレイバー?を炸裂させるのと、血塗られた聖天使がにたりとその骨を軋ませて嗤ったのは、ほぼ同時だった。全身が凍り付き、言葉にならない戦慄が背筋に走った。クラウドはアルテマの袈裟を斬り裂き、アルテマはクラウドの心を斬り裂いた。

地上で、剣聖オルランドウが鋭い眼光をアルテマに向ける。

「とどめだ。邪神よ、闇の深淵へ還るがいい!」

剣聖は全身の力を剣に収斂させ、標的目掛け無想の一撃を放った。「聖光爆裂破ア!」天から舞い降りた闘気が柱状になってアルテマに降り注ぐ。極光を浴び、もはや聖大天使アルテマはその力の全てを奪われていたのだった。

クラウドが体勢を整え、着地する。その横に無惨な姿で叩き付けられるアルテマ。噴煙が舞い上がり、視界が一瞬利かなくなった。ラムザはリーダーとして、パーティに号令をかける。

「みんな、戻るんだッ! 迂闊に近付くのは危険だぞ!」

それに従い、アグリアスやムスタディオ、オルランドウ、クラウドがラムザの元へ集まる。全員疲労困憊で、立っているのもやっとだった。見渡す限り不気味な異空間において、勇者たちはラムザという光だけを抛り所に使っていた。やがて粉塵が収まってくると、そこにいたのはもはや全ての力を出し尽くして仰臥する骸に過ぎなかった。

容姿が既に骸骨である分、本当に死んでいるのか確かめる手立が見つかからない。それに、クラウドはストライフだけは先ほどから言いようのない寒気に襲われていた。何故、アルテマは死を目前に

しながら嗤ったのだろうか。それだけがぐるぐると脳内を巡回し、この先起こることなど全く注意が行っていない。そんなクラウドを置き去りに、事態は急展開を見せる。

『モットカラ……』

「まだ、倒していないぞッ！」

むっくりと起き上がったアルテマに、一行はすかさず剣を向けた。魔の障気は濃くなるばかりで、おどろおどろしい邪悪な存在は圧力をラムザたちに押しつけている。真っ黒に窪んだ瞳孔の中に、五人は紅い光を見る。そしてクラウドは、その光が自分に向けられていることを知った。

『見エル……ソノ男、コノ世界ノ住人デハナイ。ドコカ他ノ……高位ナ世界ノ匂イガスル』

「クラウド、駄目だッ！ 耳を貸すんじゃない！」

ラムザが叫ぶ。クラウドはどうしようもない胸のむかつきを覚えた。そして同時に、針で刺すような頭痛が襲う。度々苦しめられてはいたのだが、この痛みは常軌を逸している。脳細胞がひとつひとつ悲鳴を上げて破裂しているかのようなのだ。堪らず、クラウドは頭を抱えて座り込んでしまった。

「クラウド！ しっかりしろ！」

クラウドの身体を抱きかかえたムスタディオはぎよつとした。彼の蒼い眼が、いつの間にか血の赤に染まっていた。その色は正に、現在自分たちを呪いに満ちた眼で睨んでいる聖大天使のものと同一だったのだ。「ク、クラウド！ 大丈夫か?!」ムスタディオがクラウドの肩を揺さぶる。

「おのれ、クラウドに何をするつもりだッ!!」

アグリアスとオルランドウの騎士剣に、再び燃える闘気が漲る。

「シド殿、心の臓に刺さったラムザの剣へ!」

「心得たッ!」

二人は一瞬の溜めの後、渾身の無双稲妻突きを、先ほどラムザが突き刺した剣へと放った。雷が爆音と共にアルテマの肉体を切り裂き、彼女に残った全ての魔気を吹き飛ばす。クラウドが大きな声で叫んだのと、それは同時だった。

「クラウドッ!?!」

「ラ、ラムザ……。あいつが、あいつが俺に?入ってくる?……」

「馬鹿な!」

虚ろで焦点の合わない視線が、空中を彷徨っている。クラウドは内側から浸食される気分が判った。双眸から入り込んだ侵略者は、まず脳の自由を奪い全身に電気信号を送ったようだ。びくびくと痙攣がクラウドの身体に起こり、ラムザはただならぬ事態を察知する。すると既に黒色の消し炭になりかけていた聖大天使が、高らかに笑い声を上げた。声帯が付いていないため、どこから出しているのかと思うほど掠れて奇妙な声だった。

『サ、更ニ高イ次元ヘト』

「何だつて?!」

『我ヲ導ケ、クラウド!! ストラライフ!』

「どういふことだ!?!」

オルランドウの問いに答えることなく、アルテマは亜空間に灰となって散っていった。クラウドの症状はますます悪化の一途を辿る。ガタガタと震える両腕から、血が流れ出した。固く握りしめた拳の爪は、深く肉を剔っているだろう。為す術のなくなった仲間たちは、ただ彼をじつと見守ることしか出来ない。

「ラムザ、お……お前には、とても感謝してる」

「クラウド！」

「ど、どうやらここでお別れだ。俺は元々異世界から召喚された者……イヴァリースには、不要だ、ろ」

「馬鹿なことを！」

「今なら……アルテマの魔力で歪んだ空間を越えて、イ、イヴァリースに帰れるかも知れない」

クラウドが指差した方向を見ると、聖大天使アルテマの遺骸があった場所に、僅かなワームホールが形成されていた。大きさから推測すると、長く状態を維持することは難しそうだ。

「帰るのは、みんな一緒だ！」

ラムザが叫ぶ。一同頷くが、クラウドはゆっくりと首を横に振った。

「俺には、後始末が残っているみたいだ」

「後始末？」

「俺にしか、出来ない。？コイツ？を、完全に消滅させてやる！」

「危険だ！ クラウド殿！ 貴公の心が、破壊されてしまうかも」

「アグリアスが美しい唇を歪めて言った。「そうかも知れない」ク

クラウドはさらりと言っただけ。

「でも、俺がやらなきゃ、？コイツ？は俺の世界までついてきてしまふ。それだけは、許さない」

「クラウド……！！」

ラムザの背後で、飛空艇が一隻爆発した。空間が崩壊を始めたらしい。このままでは、次元の狭間に永久に閉じこめられることになる。ひとつ、またひとつと、ラムザたちの周囲で何隻もの飛空艇が混沌へ飲み込まれていく。時間の猶予は、ない。

「は、早く行けッ！俺が信じられないのかッ……！」

「クラウド、約束してくれ。必ず、またもう一度僕らの前に戻ると……！」

「さあな。第一、あの穴がお前たちを必ずイヴァリースに届けてくれるとは限らないぞ」

「それでも、やるっきゃねーんだろ……！」

ムスタディオが、後方で気を失っているアルマ・ベオルブを抱きかかえた。彼女は血塗られた聖天使復活のための贄となり、一度はアルテマの新たな肉体としてラムザたちと一戦を交えた。激戦に耐えきれなくなつたアルテマが彼女の身体を脱ぎ捨ててくれたのは、幸運だつたのかも知れない。

今アルマは意識を失っているが、呼吸はしっかりしている。命に別状はないようだ。

「クラウド、君は記憶を失っていて、それでも僕らに力を貸してくれた。感謝するのは、僕の方だ」

「お、お前たちについていけば、元の世界に戻れると思ったのさ……」

……。他意はない」

「ストライフよ、ひとつ言っておく。決して、己を見失うことな
れ！」

オルランドウの言葉に、力強く頷いて答えるクラウド。周りの空
間が熱したガラス細工のように曲がり始めた。不可思議な景観に、
一瞬心を奪われる一行。だが時間は待つてくれない。ムスタディオ
はラムザを呼び、アルマを抱かせた。アグリアスは剣を収め、クラ
ウドに深く頭を下げる。オルランドウが先頭を切つて、空間の穴へ
と走り出した。ムスタディオ、アグリアスもそれに続く。

ラムザはアルマをしっかりと抱き直すと、もう一度クラウドの方
を向いた。

「それじゃあ、また！」

「……ああ！」

クラウドが最後に見たのは、踵を返して走り出す戦友の後ろ姿だ
った。流れてゆく意識の中、クラウドの頭にイヴァリースでの出来
事が走馬燈のように駆ける。そして、消滅していく。自分の世界と
いうのがどこにあつて、どんなもので、何という名前なのかクラウ
ドには思い出すことが出来ずにいた。そして、その世界で失った、
何かとても大切なものも、記憶の此岸へ忘れてきていた。

だがこの最終局面に、クラウドはその破片を見た。

名前も知らない人々の顔。恐らくこれが、クラウドの記憶。そし
て、記憶の那由多にひとつだけ淡い光を発し、クラウドを求める影。
それはイヴァリースでの答え。

クラウド。ストライフの旅、ひとつの終局の形。

？

草……これは、草の匂い？

俺は、一体……。

『ココハオマエノ深層意識。オマエ自身ガ創リ出シテイル、本来オマエガ歩ムハズノ世界』
「アルテマ……ッ！」

跳ね起きたクラウドの横で、小さな悲鳴が聞こえた。そこは見渡す限りの大草原。人の手が一切入っていない、植物たちが大手を振るって生きている場所のようだった。地平の果てまで続く草原地帯を、クラウドは見つめた。一瞬、自分が何故ここにいるのか忘れた。頭の中に侵入してきた何者かの意識に反応して目覚めたはずなのに、堅く眼を閉じてみる。

「あ、あの、大丈夫？」

先ほどの悲鳴に気付かなかったのか、クラウドはその声を初めて認識した。驚いて、声の主がいると思われる方向に眼を向ける。そこには、見覚えのある女性がじっとクラウドを見つめていた。

「君は、花売りの……」

「ああ、覚えててくれたのね。あのときはどうもありがとう。私、お礼も言わずに逃げちゃって」

「するとここは、イヴァリースなのか？」

クラウドは再び首を回して周囲の情報を得ようとするが、眼に映るのは大草原の緑と大空の青だけだった。どこかで鳥が鳴いている。絵に描いたように美しい場所だった。

「他にどこがあるの？ おかしな人オ！」

女性はくすくすと笑った。栗色の髪の毛が風に揺られ、彼女の匂いがクラウドの鼻に迷い込む。

その女性には、以前出会ったことがあった。ラムザ「ベオルブに召喚され、まだここがどんな世界なのか全く判らなかつた頃、クラウドはふらりと彷徨い出たことがある。その際、何の気もなしに立ち寄った貿易都市ザーギドスで、彼は彼女と出会ったのだ。

彼女は借金取りまがいの荒くれに襲われていた。野太い荒くれたちの腕が彼女の華奢な身体を無理矢理犯そうとしたときに見せた、悲痛な表情。クラウドの頭がはち切れんばかりの頭痛に襲われ、一瞬誰か知らない女性の顔が見えた気がした。次の瞬間にはもう、クラウドは女性と荒くれの間に割って入って、戦闘を開始していた。駆け付けたラムザたちに助けられ、荒くれどもを撃退した頃には、女性の姿は消えていた。

クラウドはラムザたちと行動を共にする。そして、彼女のことを忘れていた。

否、忘れてなどいなかったのかも知れない。クラウドは、彼女のことを知っていたのだ。

心の奥深く、誰も立ち入ることの出来ない彼だけの閉ざされた空間に、彼女の記憶はあつた。

「私、エアリス」

「え……」

「どうしたの？ 珍しい名前でもないでしょ？」

「あ、ああ、そうだな。済まない。俺はクラウド。クラウド「ストライフ」

「クラウド、クラウドね。いい名前！」

「そうか？」

エアリスは本当に嬉しそうだった。

「ね、クラウド？ あなたはどうしてこんなところにいるの？」

「どうして……？ どうしてって俺は」

『ソウ、ココハオマエノ安息ガ約束サレル地』

「君に……どうしてももう一度会いたくて」

クラウドはエアリスの眼を覗き込んだ。「えっ？」驚いたように身を固くするエアリス。一瞬、クラウドはどうして自分がこんなことを言っているのか考えた。何かが間違っている気がする。自分はここにいるはずではないような気がするのだ。吹き抜ける風が、そんなクラウドの疑問も不安も、全てを吹き飛ばしていく。

エアリスはじっとクラウドを見つめていた。そして、何とか答える。

「わ、私も、どうしてかな。もう一回、あなたに……会いたかった」

クラウドの胸が万力で締め付けられたような痛みを覚える。それは肉体的な痛みではなく、むしろ彼の心が負った痛みだったのかも知れない。クラウドは思わず胸を押さえた。確かどこかで、彼女のこんな表情を一度見たことがある。それに、何故だろう。エアリスを見ていると、切なさで涙が溢れそうになる。強く強く抱きしめた衝動に駆られる。

『抱キシメルガ良い。想イヲ解キ放ツガ良い。ココハオマエタチニ』

人ダケノ世界。誰モ、邪魔ハ出来ヌ』

エアリスはクラウドを家に誘った。自分でも、どうしても二度しか会ったことのない男にここまで気を許してしまうのか判らなかった。彼女は今、純粹な欲望に駆られていた。触れたい。もっと、クラウドに触れたい。そして、触れて欲しい。見つめて欲しい。

愛して欲しい。

『ソノ女ハ紛レモナク？本物？。何故ナラ、オマエ自身ガ鮮明ニ記憶シテイル存在ダカラ。幻デモ、勿論オマエノ妄想デモナイ。ズツト心ノ檻ニ閉ジコメラレテイタ、眞実ノ想イ出』

エアリスの家はがらんとしていた。家族はいないのだという。何故かという問いは、彼女にとって余りにも残酷なような気がしたので、敢えてクラウドは踏み込まなかった。これ以上、彼女の寂しそうな顔を見たくはなかった。このとき既に、クラウドの耳に聖天使アルテマの声は届かなくなっていた。甘言ばかりを並べ立てるアルテマの囁きはもはや、彼にとって必要なくなっていたからだ。クラウドはエアリスという存在に酔い始めていた。どこか懐かしい匂いを持つこの魅力的な女性に、身も心も奪われ始めていた。

『オマエガソノ女ト結バレ、全テノ思考ヲ放棄シタトキ、オマエノ身体ハ私ノモノ。記憶ガ戻リ、目覚メテモ、ソコニ輝クノハオマエデハナイ。ココデ永久ニ愛シ合ウガ良イ。覚醒ナキ夢ノ中デ、己ヲ棄テテ生キルガ良イ』

気が付くと、二人はお互いに見つめ合っていることがある。我に返って視線を逸らしても、幼い鼓動は止められない。目的を忘れ、エアリスと夢幻の世界で暮らす日々は、とんでもなく甘美で刺激的な毎日だった。エアリスはクラウドの中で創り出された存在。だから、？偽物？ではない。まだ出会って日が浅いにも関わらず、クラウドはエアリスのことを細かしく知っていた。同じようにエアリスも、得体の知れないこの青年のことを昔から知っているような気がした。ふとした瞬間に見せる仕草に、お互いの視線が釘付けになる。涙が出そうなくらい、クラウドはエアリスを、エアリスはクラウドを愛しく想い、そして言いようのない苦しみに苛まれた。

もう、どれくらい二人きりで過ごしただろう。時間の概念が消えかけていた。実に様々な話をして、笑い合った。手を握り、見つめ合った。だが、何かが違う。クラウドは眼の前にいる女性を見つめる度に愛しい気持ち膨れ上がる。それと同時に、心が泣く。さめざめと声を上げて泣く自分の心は、エアリスを直視出来ないほどの罪悪感を与える。

記憶が、逆流している。眼が、耳が、頭が、身体が、肌が、細胞が覚えている。クラウドはエアリスを？知っていた？。激流のごとき記憶の流れを遡っているうちに、あの耐え難い頭痛がぶり返す。脳の中枢から末梢へ駆け抜ける旋風。痙攣を起こす右眼の瞼。（俺は何かを忘れていないか）そんな考えが止めどなく湧き上がっていた。

「私ね、クラウド」

ある日、エアリスがそよ風の吹き込むテラスで言った。

「今とつてもしあわせだよ」

幸せ？

しあわせ。

エアリスのしあわせって、何だろう。

「クラウドは、今しあわせ？」

幸せ？

しあわせ。

俺のしあわせって、何だろう。

「違うよね？ クラウド、忘れ物してるよね？」

エアリスは微笑んだ。クラウドの血が…… 逆流してゆ
く……。

薄暗い路地裏。花を売る、華のような笑顔。一ギル。細い腕。花
畑。教会。汚れたステンドグラス。優しい声。瓦礫。飛び移る。手
を握る。公園。寂しげな顔。（聞こえる……？）嫉妬。歓楽街。い
かがわしい店。余裕の笑顔。本当に楽しそうな笑顔。女性用の服。
スクワット。女装。羞恥。大きな館。引き離される。不安。焦り。
（クラウド、私の声、届いてる……？）不細工な男。涙の笑顔。安堵
街を支える柱。銃声。ヘリコプター。悲鳴。栗色の髪の毛。爆発。
決意。巨大ビル。カプセル。異形。狂気。握りしめた手。温かな感

触。大いなる安堵。バイク。追っ手。不安げな表情。大平野。旅路。
（私は…あなたが？記憶？しているエアリス）大きな眼。くるくる
と表情豊かな振る舞い。銀髪の男。吐き気。虚脱感。憎しみ。長い
刀。真つ赤な血。どこかの娯楽施設。引かれる腕。懐かしい匂い。
（偽物じゃないけど、本物でもないんだ）老人と獣。星たちの嘆き。
沈鬱な顔。切なさ。夕焼け。笑顔……笑顔……笑顔……笑顔……。

古代種。

ジェノバ。

さだめ。

……さだめ？

夜観覧車彼女の手さだめって何だ泣きそうな心でも笑ってるさだ
めって何だじつと見つめるエアリス古代種の宿命通り過ぎてゆく花
火エアリスが何か言ったどういう意味判らない神殿古代種の黒マテ
リア行っちゃいけないような気がしてた遠くに離れてセフィロスが
来る何をするつもりだよめろセフィロスやめてくれエアリスが行っ
てしまう遠くへ行ってしまふ黒い輝き凍り付く背筋耐えられない我
慢出来ない夢の中エアリスが笑うどうして何も出来ない俺は何だ世
界なんてどうでもいい何で俺は黒マテリアメテオ大切な人を救うこ
とすら出来ないんだホーリー忘らるる都貝殻イヤだここから先を見
たくない白マテリアどうしてまたこれを見なくちゃならないんだ螺

「それはクラウドが忘れ物をしてるからだよ」

エアリスはクラウドを抱きしめる力を次第に抜いていき、ゼロになったところでまじまじとクラウドの眼を見た。クラウドもじつと彼女を見つめ返す。何も変わっていない。クラウドは思った。残酷なほど、エアリスはクラウドが覚えている姿のままだった。守つてやると約束したのに……悲しませないと誓ったのに……。

「そんな顔しないで」

「無理だ……！」

「私は幻じゃない。あなたの中に入ろうとしてる？何？が創り出した偽物でもない。クラウドの中の？私？。クラウドが見てくれた、覚えていてくれた？私？だよ」

「わかつてる！ わかつてるんだ。だから……俺は自分を許せないッ！」

「それなら、私とずっと一緒にいてくれる？」

エアリスの言葉に、クラウドはハツとなる。酔いから醒めたような感覚だ。臍気に思い出してくる、戦友たちの姿。ラムザ「ベオルブ、アグリアス」オークス、シドルファス「オルランドウ、ムスタディオ」ブナンザ……。そして聖大天使アルテマ……。最後の大仕事だった。クラウドに半ば寄生し、身体を乗っ取り、高位の次元へと逃げようとするアルテマを討つこと。それがクラウドに課せられた最終試練。

だが、これは試練と呼ぶには余りに幸福すぎた。失った笑顔を取り戻し、腕の中で冷えていった肌のぬくもりを呼び戻し……エアリス「ゲインズブル」というかけがえのない人ともう一度出会うことが出来た。あの天使のような笑顔と、再会することが出来てしまった。クラウドはもう、彼女と離れたくない。二度と自分の腕から逃がしたくなかった。たとえそうすることによって、血塗られた聖天

使を取り逃がす結果になったとしても。

だがエアリスは微笑み続ける。

「ここですつと、私と暮らしてくれる？」

「お、俺は」

「私はそうして欲しい。あなたと二人で、ずつとずつと生きていきたい。この素敵な夢の世界が永遠に続いて、クラウドのことを愛し続けたい。我が儘かな？ もうこれ以上、しあわせになりたいって、思っちゃダメなのかな」

ぼろぼろと際限なく、エアリスの両眼から透明な涙が溢れ出てくる。唇を歪め、必死に堪えようとしているが、許容量を超過した涙は彼女の堰をあつという間に乗り越え、頬を、そして拭おうとする手を濡らす。クラウドはもう少しで手放しそうになった自らの意識を、必死で手繰り寄せた。アルテマの気配が濃くなっている。いつクラウドがギブアップしてもいいように、息を殺してすぐ傍で睨んでいる。クラウドはエアリスの肩を抱いて、空を見上げた。イヴァリースの蒼天。どこまでも続くエーブル。雲が流れ、時間が流れ、クラウドとエアリスの蜜月が過ぎていった。これは仕組まれた安息だったのだろうか。聖天使アルテマによって最初から最後までシナリオ通りに動かされただけなのだろうか。

「忘れ物なんて、本当に忘れて欲しい……。でも……。でも私、クラウドのこと好きだから、大好きだから。自分の世界に戻って、クラウド。あなたが本当に歩むべき、あなた自身の世界に」

「エアリス……」

「あなたと過ごした数日間、私本当にしあわせだったよ。私、絶対、忘れない」

『マタ彼女ヲ独リニスルツモリカ？』

「俺は、やっと見つけれられた気がする」

「私も、見つけられて良かった」

『キ、貴様ハ最低ノ男ダ、クラウド。何故一緒ニイテヤラナイ。何故彼女ニ孤独ヲ押しツケル！ 現実世界ニ戻ッタトコロデ、彼女ハモウイナイ。永久ニソノ笑顔ヲ失ウコトニナルゾツ！！』

「私はいつも、クラウドの中にいるから……」

「エアリスはずっと俺の中にいる。もう二度と、離さないッ！」

世界が歪む。クラウドの眠りが醒めるのだ。周囲の景色が縦に何百メートルも伸び上がって、天へ吸い込まれていく。クラウドとエアリスはしっかりと抱き合った。クラウドは蒼い眼で、エアリスはネオグリーンの眼で、二人は見つめ合う。何故か涙がこぼれてきた。別れではない。しかし、二人が出会うことは二度とない。

いつも笑っていたエアリス。素っ気ないけれど、本当は優しいクラウド。無邪気で、無垢なエアリス。強がりなクラウド。綺麗な声で歌うエアリス。純粹で、繊細なクラウド。

エアリス。
クラウド。

クラウドはそっとエアリスに唇を寄せた。閉じられたエアリスの
瞼の隙間から、一筋の涙がこぼれ落ちる。

キスは甘くなかった。

ただエアリスの、唇の味がした。

切り裂かれた空間の外で、クラウドは剣を抜いた。そこは最終決戦の舞台と同じ場所。飛空艇の墓場だった。今にも崩れ落ちようとしている足場に、彼は立っていた。拳を握りしめ、思い切り腹から気合いを込めると、クラウドの中から何かが飛び出した。仄暗いヴェールのような光に包まれたそれは、クラウドに取り憑いて高位の次元へ逃げようとした、聖大天使アルテマだった。アルテマは今にも干涸らびそうな骨の肉体を軋ませ、何とか立ち上がる。そして、呪いの言葉を吐いた。

『ウヲヲヲヲヲッ！！ ドウシヨウモナイ馬鹿者ダ貴様ハアッ！！』

「そうかい、お前はこれからそのどうしようもない馬鹿者に斬られるんだ」

仄かに胸が暖かい。クラウドは剣を持たぬ方の手で、おもむろに胸を押さえた。エアリスの笑顔が脳裏に蘇ってくる。確かに、いる。

「来い。お望み通り、あの世っていう高位な世界へ送ってやる」
『グウオアアアアアア！！』

無謀な突進に、以前の知性は微塵も感じられない。アルテマの爪が空を切り、体勢が崩れる。クラウドは身体を収縮させ、運動エネルギーを生成すると、次の瞬間一気にそれを解き放った。繰り出された強力な回し蹴りがアルテマの脆弱な骨を粉碎する。想像を絶する激痛に、堪らず奇声を発して悶える聖大天使。クラウドの眼が輝

き、手にしたマテリアブレードに極光が宿る。

「冥土の土産に見せてやる。これがお前の行きたがってた、？高位な世界？の力だッ！！」

掲げた剣を振り下ろす。そして、彼は崩壊してゆく亜空間で、奥義を放った。十五回めの斬撃が繰り出された頃、聖大天使アルテマは既に魂を失っていた。最後に彼女が見たもの。それは涙と笑顔と共に剣を振り下ろす、金髪の青年の姿であった。

ひとつの物語が、終わりを告げる。

「……い、おい！！ 大丈夫か！ ティファア！！」

声が聞こえる。（……俺はクラウドだ。ティファじゃない）眼が開かない。身体中が何ヶ月も運動せずに硬直してしまったような感覚だ。それに何か、全身濡れているような気もする。鼻や口の中にも水気が入り込んでいるようだが、その部分の筋肉すら上手く動かすことが出来なかった。

「う、ううん……。バレット？ 私たち、帰ってきたのね？ クラウドは……彼は大丈夫？」

「ああ、心配いらねえ！ しぶとい野郎だぜ、まったく！」

随分大きな声だ。確かに少々耳障りではあったが、どこか懐かしい。（バレット。バレットか。覚えてる。ああ、覚えているとも）耳だけは異様な感度を保っているようだ。クラウドは聞き耳を立てることしか出来ない自分を恥ずかしく思った。すぐ横で、女性の声がする。（それにティファ。ティファ＝ロツクハート。ただいま、それにありがとう）閉じられた瞼の間に、微かな光明がさした。薄明るい膜を透過して、陽の光がクラウドの眼に入ってくる。

「ね、バレット。私、ライフストリームの中で本当のクラウドを見つけたんだ。ううん、私じゃない。彼自身が自分の力で見つけ出したんだわ」

「ああ、わかってる。疑ったりして悪かったな。しかしお前にや負けたよ。大した女だぜまったく！」

「……エアリスも、いたんだ。私は見ていることしか出来なかったけど。クラウドとエアリス、とつても幸せそうだったなあ。ちょっと、妬けちゃった」

「オイオイ、クラウドの野郎、夢の中でエアリスと密会かア?!
がはは! こいつも大した野郎だぜ!」

バレット……ティファ……。

そうか、俺は、戻ってくる事が出来たのか。

クラウドはイヴァリースの戦友たちのことを思い浮かべた。ラムザたちは、無事に還ることが出来たのだろうか。あのワームホールが、イヴァリースに繋がっているという確たる証拠はどこにもないだが、身も蓋もない言い方をすれば、多分大丈夫な気がする。彼らならきつと、元の世界へ還ることが出来るのではないかと、クラウドは思っていた。

波音が聞こえる。

「人間って、何てたくさんものを心の奥にしまってるんだろう。」

何てたくさんことを忘れてしまえるんだろう。不思議……だよ……

…ね」

「おい、おい! ティファ?!」

心という名の、秘密の小箱。

その中に、人間は多くのものを隠し続けている。生きていく限り、人はその箱の中にそれぞれの秘密を隠し続けていくのだろう。誰にも見られることなく、見つけられることなく。

クラウドは、箱の中に戻ってしまったものを忘れていた。自ら忘れ去ろうとしたのではないのかも知れない。これ以上傷付くのが怖くて、二度と思い出さなくなると、箱の奥深くに封じ込められていたもの。それは確かに、クラウドにとって一時的な心の安らぎをもたらした。

再び遠のいていく意識の中で、クラウド「ストライフは手にした一輪の華を眺めていた。幻影なのか、現実なのか。それは綺麗に咲き誇り、ピンクの花弁をクラウドに向けて惜しみなく開いている。クラウドが心の小箱に隠していたものだった。

ひとときの安らぎ。だがそれは、永遠ではない。この華を守れなかった代償としてクラウドに襲いかかる苦痛を忘れることなど、出来はしなかった。いつでも蓋をしていたはずの小箱から香る、この華の匂いを忘れられるはずがない。

心の秘密を打ち明ける勇氣。クラウドには、それがなかった。心の秘密を受け入れる強さ。クラウドには、それがなかった。

ラムザたちは、それを教えてくれた。こことは異なる次元の世界で、クラウドは確かに新たな友を得た。誰もが己の心に対する勇

気と強さを持ち、決して最後まで自身の想いを曲げることなく走り続けた勇者たち。彼らと共に戦えたことを、今クラウドは誇りに思う。

そして、最後の一押しをしてくれたこの華に、ありがとうと言いたかった。

クラウドは華を持った手を胸に当てた。自然と、涙が出てくる。

「……ラムザ、お前は何を手に入れた？」

遙か遠くで、ラムザもまた、光を見ていると信じて。

「俺は……」

微笑むと同時に、エアリスの笑顔が瞼の裏に浮かんだ気がした。

T h e e n d

(後書き)

FFTでのクラエアの絡みを見て妄想したものです。というかそういうサブストーリーを是非作ってほしかった……。エアリスさん、タクティクスの世界では脇役でした。オーディションに落ちたのでしょうか(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4202o/>

HAPPY END

2010年10月21日01時59分発行